

Reflection 6

ICIS Newsletter, Kansai University



Contents

第2回次世代国際学術フォーラム	2
第4回研究集会	4
第3回国際シンポジウム	5
ICIS共催シンポジウム	6
コラム／坊津で考えたこと —交渉拠点のその後—	7
文化交渉学専攻RA対談	8
連載コラム／食の文化交渉学 第5回	9
活動報告およびお知らせ	10
紀要募集要項	11

ICIS

文部科学省グローバルCOEプログラム
関西大学文化交渉学教育研究拠点

Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University

第2回

次世代国際学術フォーラム

2009年12月12日・13日、文化交渉学教育研究拠点(ICIS)主催の「第2回次世代国際学術フォーラム」が開催された。

同フォーラムは本拠点の若手研究員が中心となり、今後の活躍が期待される各分野の若手研究者とともに「文化交渉」というテーマを通じ、専門化した知識や視野を共有し、それを自身の研究にフィードバックしていく場を目指している。

2008年12月の第1回フォーラム「境界面における文化の再生産」では、文化交渉の「場」の再発見に焦点をあて、「文化交渉とは、従来固定的に捉えてきた国家間・民族間にとどまらず、人の心、営み、そして言葉の中にも存在する」という共通認識を得た。これを受けて第2回フォーラムでは、文化交渉の「結果」に注目し、何が起り、変化し、創られたのか、そしてその変容をもたらした背景は何か、といった問題意識をもとに三つのセッションを構成し、諸分野の研究者から報告を賜った。

ジョセフ・ボスコー氏(香港中文大学・副教授)による基調講演は、ある事象に対する宗教的・文化的・科学的な視点を、学問的にいかに受け入れ、整合させていくべきかについて述べられたものである。これは「共通の主題や類似の事象を様々な切り口から語る諸分野を、文化交渉という枠組でいかに統合的に結びつけ、理解していくのか」という同フォーラムの目的にも通じている。



ジョセフ・ボスコー氏

井上充幸氏(COE特別研究員)の司会による第1セッションは「聖なる水・こころの水—自然と人との相互作用—」である。生命の根源である水は、人とかわるることによって清浄や聖性、豊穰のイメージを生み出してきた。そうした自然と人の関係から生み出される「水」の変容に注目したものである。台湾の道教儀礼に登場する「水」の意義と効能について論じた山田明広氏(関西大学アジア文化交流研究センター・PD)、中国山西省の

天水農業信仰における多彩な祈雨祭祀と展開、水信仰の広がりについて論じた井黒忍氏(京都大学・非常勤講師)、中世の日本における農業用水と神社信仰、農耕儀礼について論じた川端泰幸氏(大谷大学・非常勤講師)、歴史地理学



川端泰幸氏(左)と井黒忍氏(右)の視点から朝鮮半島における水の象徴性とその思想的背景、景観化について論じた崔元碩氏(韓国慶尚大学校・研究教授)の4名による報告が行われた。浄化の媒体、神、権力の象徴、暮らしの情景など、異なる四つの地域と時代において、水が人とかかわることによって見せる変容のバリエーションは多彩である。これについてコメンテーターのシンジルト氏(熊本大学・准教授)は、「自然と人」という近代西欧的な二項対立の発想が東アジアの伝統観念を考えるものさしとなり得るのか、そしていくつかの報告で用いられた「心性」の語について、それが何を指すものであるのか、また史料に見られる当時の人々の意識と、今に息づく伝承や信仰の存在を結びつけることは可能か、とコメントした。

第2セッション「エスニック要素と宗教実践、そして宗教コミュニティ形成の文化交渉」では、3名の報告者が、個人の信仰と国家の視点、エスニック要素にとらわれない文芸交流やコミュニティなど、宗教実践を軸にした文化交渉の展開と変容について論じた。川邊雄大氏(国士舘大学・非常勤講師)の報告は、近代における東本願寺派の中国布教活動と、現地の文人との交流に関するものである。吉本康子氏(国立民族博物館・外来研究員)は、民



川邊雄大氏

間信仰の要素を多く含む「バニ」とスンニ派「イスラム」というチャム系の二つのムスリムについて、セッションリーダーである黄蘊氏（COE-PD）は、マレーシアの仏教協会が持つ民族やコミュニティの重層性と、国境を越えた彼らの活動について、それぞれ報告した。コメントーターの芹沢知広氏（奈良大学・准教授）は、中国布教に対する日本人仏教者の認識、ヴェトナム共和国（南ヴェトナム）時代の宗教・民族政策といった個別報告への質疑に加え、報告における「宗教コミュニティ」や「エスニック」の概念などについて提言した。時代や地域によって見えてくる宗教実践や変容の現象は様々であり、それらは扱う資料や方法論によっても異なってくる。そうした情報・視点の豊かさをいかに結びつけていくのが課題となろう。

第3セッションは氷野善寛氏（COE-DAC）の司会のもと、翻訳や外国語のテキストから、異文化間を往来し解釈される言語と概念、言語教育の変容が論じられた。孫青氏（COE-PD）の報告では、チャンバーズの *Political Economics* が中国語に訳出される中で、訳語が、政治や社会、文化的背景を異にする口述者と筆記者を介し変容していく過程が読み解かれている。また清朝末期の中国人が用いた日本語学習書を比較し、欧州と中国の二地域で培われた学習法が存在したことを指摘した鮮明氏（北京外国語大学・博士後期課程）、宣教師プレマールの中国語学習書『中国語文注解』から、当時の西洋人に必要な学習法や彼らの中国語認識を読み取った千葉謙悟氏（中央大学・助教）の報告は、文化交渉研究の前段

階とも言うべきもので、この成果に基づいた変容の過程が今後いかに明らかにされるのかが注目される。コメントーターの陳力衛氏（成城大学・教授）は、各報告がいずれも現今のホットな研究テーマであり堅実な実証



孫青氏

研究だと評価しつつ、個別の提言とともに、思想史なども視野に入れた新たな方法論の開拓の可能性に触れた。

各報告はセッション内で一応の完結を見ているが、第1・第2セッションにおける信仰や心性の問題、そして第2・第3セッションにおける海外宣教と現地語の習得・教育など、セッション同士のつながりも見いだすことができた。これらが各報告者にどのように受け止められ、いかなる形で展開していくのかが期待される。

フォーラム終了後、報告者からは、専攻や方法論を異にする研究者からの情報やコメントに刺激を受けたという感想が得られた。「専門化」が必ずしも研究の豊かさにはつながらないことを自覚し、人文学研究の中に漂う閉塞感を打ち破っていくこともまた同フォーラムの意義であり、文化交渉学の目標でもあろう。そうした思いがフォーラムに参加いただいた人々、特に次世代の先を担ってゆく大学院生に印象づけられ、課題として記憶されたならば、これに勝る喜びはない。

篠原啓方（COE特別研究員）



関係者記念撮影

第4回 研究集会

近代東アジアにおける文体の変遷 —形式と内実の相克を超えて—

2009年12月20日、関西大学においてICIS・CSAC共催による第4回研究集会「近代東アジアにおける文体の変遷—形式と内実の相克を超えて—」を開催した。国内外の研究者による報告の要旨は以下のとおりである。

基調報告

夏曉虹（北京大学・教授）「白話文告と『聖諭』講釈—清政府と晩清白話文運動」、崔溶澈（高麗大学校・教授）「近代韓国における翻訳小説の文体の変遷」、内田慶市（ICIS・教授）「近代欧米人の中国語文体観」、以上3件の報告がなされた。



夏曉虹氏

夏氏は、清朝政府による白話の告示や『聖諭広訓』の白話読本の分析を通じて、それらが晩清の白話文運動に影響を及ぼしていたことを明らかにした。

崔氏は、近代の韓国において展開された西洋文学の翻訳をめぐる論争をふまえ、『紅樓夢』を題材に、中国小説の翻訳文体が平易なハンゲル体が変わっていく過程を考察した。

内田氏は、宣教師たちが書いた様々な文体（文言・口語・白話）の文章を検証し、近代欧米人がいかなる中国語を学び、いかに理解・認識したかを論じた。

セッション1

安田敏朗（一橋大学・准教授）「文体ノ改善」の行方—日本語口語文体の戦前・戦後」、齋藤希史（東京大学・准教授）「近代訓読体と東アジア」、奥村佳子（関西大学・准教授）「唐話課本の会話文と白話文」、石崎博志（琉球大学・准教授）「琉球における文体の変遷からみた『琉球譯』の言語」、以上4件の報告がなされた。



崔溶澈氏

安田氏は、国語審議会などによる諮問、大東亜共栄圏建設に伴う議論、憲法への口語体の採用など、「口語文体」をめぐる様々な動きを、戦前・戦中・戦後と時代を追って示した。

齋藤氏は、「訓読体」が

明治時代に公的な文体となったことの意味を、思想的・社会的背景から説明し、さらに東アジアにおける近代通用文体の成立という観点から考察した。

奥村氏は、江戸時代の中国語資料である唐話資料について論じ、唐通事を書き残した様々なテキストを比較し、各々の特徴を明らかにした。

石崎氏は、1800年に編纂された『琉球譯』を中心に、琉球の文字資料がどのような言語と文体で記され、漢文訓読がどのように行われていたかを分析した。

セッション2

王風（北京大学・副教授）「魯迅兄弟初期の翻訳と現代中国語の書記言語」、竹越孝（愛知県立大学・准教授）「朝鮮時代末期における中国語会話書—その文法と文体」、趙冬梅（高麗大学校・副教授）「朝鮮時代後期における漢文小説の文体について」、沈国威（ICIS・教授）「清末民初の国民必読書の文体について」、以上4件の報告がなされた。



内田慶市氏

王氏は、魯迅、周作人兄弟の初期翻訳作品を中心に、両者の文学活動にみる白話文の実践、および書記言語との関係について考察した。

竹越氏は、朝鮮時代末期の会話書を探り上げ、それぞれの編纂事情や相関関係について考察し、特殊な用法の漢文が東アジア地域に普遍的に存在していたことに言及した。

趙氏は、朝鮮の中長篇漢文小説と中国の古典白話小説との比較を通じて、後者が前者に及ぼした影響と、朝鮮の漢文小説の持つ独自性について考察した。沈氏は、国民教育用の啓蒙書である「国民必読書」から代表的な2点を探り上げ、簡易版の必要性、文言と白話の区別、形式と内容の矛盾およびその解決について検討した。

井上充幸（COE特別研究員）

第3回 国際シンポジウム

文化交渉としての宣教・布教
—近代以降の新しい趨勢—

2010年1月23日に関西大学文化交渉学教育研究拠点において、「文化交渉としての宣教・布教—近代以降の新しい趨勢—」と題する国際シンポジウムが開催された。

シンポジウムは午前の部と午後の部からなり、本学の宮本要太郎氏を始め、中牧弘允氏(国立民族博物館・教授)、徐以驊氏(復旦大学アメリカ研究センター・教授)など7人の研究者による研究発表がなされた。今回のシンポジウムはキリスト教、仏教、「日系」宗教の宣教・布教、国境を越えた広がりにより焦点を当てたもので、文化交渉の視点から有意義な議論を展開した。研究報告の内容は以下のとおりである。

午前の部

ハワイにおける「日系」宗教

宮本要太郎(関西大学・教授)

ハワイにおける日系宗教の流入は三つの時期に分けられ、第1期は1900年前後で、浄土真宗をはじめとした仏教各派や神道教団が流入した。第2期は1920年～30年で、「古手の」新宗教である天理教や金光教などが流入した。第3期は1950年代以降で、海外布教を開始した新宗教が流入した。今後はハワイ人や日系人としてのアイデンティティと日系宗教とがいかに関連し、融合していくかが注目されることである。

アメリカにおける仏教の布教と浸透

岩本明美(関西大学・非常勤講師)

アメリカの仏教実践者はアジア系移民仏教徒と非アジア系仏教徒に大別され、後者のうち大半が禅・チベット仏教・テラワダ仏教の実践者であると言われている。本報告では、日本の禅のアメリカへの布教を振り返り、禅マウンテン僧院がアメリカ文化の中でいかに根付いたのか、僧院の特徴及びそれらの特徴を持つに至った背景について考察がなされた。



関係者記念撮影

モラヴィア教会のチベット布教

伏見英俊(ICIS・教授)

キリスト教宣教師による聖書のチベット語翻訳は、ドイツのプロテスタント系教団モラヴィア宣教団によって進められた。ドイツにおける初期のチベット研究の歴史は、Heinrich August Jaschke & August Hermann Franke(1870-1930)を始めとするモラヴィア教会の宣教師たちによる聖書翻訳の歴史でもあるといえる。

賀川豊彦と中国

劉家峰(華中師範大学・教授)

賀川豊彦は、牧師、社会活動家、平和主義者など多岐に渡って活躍した日本現代史における重要人物である。彼は戦前何度も中国を訪問し、キリスト教の布教及び講演を行った。本報告では、彼が中国で行った活動及びその影響について、キリスト教社会主義者、キリスト教平和主義者という彼の2つの側面から分析を行った。

午後の部：特別講演

中牧弘允氏(国立民族博物館・教授)、徐以驊氏(復旦大学アメリカ研究センター・教授)、土屋博氏(北海道大学・名誉教授)はそれぞれ「グローバル宗教の経営とマーケティング—アジア系宗教を中心に」、「日本におけるキリスト教の宣教」、「世界布教宣教の現在」と題する講演を行った。

アジア宗教のグローバルな展開とその経営戦略、日本におけるキリスト教の伝道・受容の歴史及び日本のキリスト教界の特徴、宗教の布教活動と国際関係、通信革命を内容とする三つの講演では、伝統と現代を結びつけるスケールの大きな問題提起により、会場内の活発な議論が促された。

黄蘊(COE-PD)

韓国国学振興院／ICIS 共催国際シンポジウム

「朱子『家礼』と東アジアの文化交渉」

文化交渉学としてのフィールド研究を目指すため、2009年11月2日・3日の二日間、韓国慶尚北道安東市の韓国国学振興院において本学ICISとの共催国際シンポジウム「朱子『家礼』と東アジアの文化交渉」(주자가례와 동아시아 문화교섭)が開かれた。

ICISのメンバーとして陶徳民教授および吾妻が、書院科研・基盤研究A(代表：吾妻)のメンバーとして三浦國雄、湯浅邦弘、嶋尾稔、井澤耕一、白井順が参加し、それぞれ研究発表を行なった。セッションは第1部会「朱子家礼の知性史的脈絡」、第2部会「朱子家礼の拡散過程」、第3部会「東アジアの家礼文化の諸様相」に分かれ、第3部会はさらに「中国家礼文化の諸様相」、「日本家礼文化の諸様相」、「韓国家礼文化の諸様相」の3分科会で実施された。韓国の研究者はもちろん、アメリカのパトリア・イーブリー、カナダの宋在倫、中国の楊志剛、台湾の田世



シンポジウムでの発表

民・何淑宜といった『家礼』の代表的研究者も参加し、『家礼』に関する、おそらく世界で初めての国際学会となった。『家礼』研究の世界最先端に行く学会だったことになる。

このほか、シンポジウムに先立ち、書院科研のメンバーは安東地方の黙溪書院、高山書院、屏山書院、紹修書院や宗族の祠堂などを調査参観した。また陶山書院の儒教祭祀に参加するとともに、豊山金氏宗家における盛大かつ厳粛な不遷位祭祀を実見するなど、儒教儀礼に関して貴重な経験を得ることもできた。



陶山書院での儒教祭祀

お世話になった国学振興院の金炳日院長、朴元在研究部長、国立慶尚大学校の張源哲、金徳鉉両教授には心から感謝申し上げたい。

なお、シンポジウムの詳細についてはICIS紀要『東アジア文化交渉研究』第3号の「活動報告」を参照されたい。

吾妻重二 (ICIS・教授)

ICIS／ブリティッシュ・コロンビア大学共同ワークショップ

「15-16世紀の東アジアにおける国際関係の多層性」

2010年4月17日、関西大学において、ブリティッシュ・コロンビア大学とICISの主催による共同ワークショップ「15-16世紀の東アジアにおける国際関係の多層性」が開催された。まず原田正俊氏 (ICIS・教授)「15・16世紀における日本僧と東アジア—日本と朝鮮の交流を中心に—」と野田泰三氏 (京都光華女子大学・教授)「室町幕府・守護大名の対外認識」では、14世紀後半から15世紀を中心に、日本の対東アジア関係の前提および対外認識が紹介された。次いで李相薫氏 (韓国海軍士官学校博物館・企画室長)「壬辰倭乱講和進行過程に於ける被虜両王子への役割の強要」・金康植氏 (東西大学校・教授)「壬辰朝日戦争時期における日本の朝鮮支配策の変化と朝鮮の対応」が韓国の、北川央氏 (大阪城天守閣・研究副主幹)「豊臣秀吉の対外認識」が日本のそれぞれの側から、16世紀末の壬辰倭乱、秀吉の朝鮮侵略を巡る諸相について検討を行った。最後

に許南麟氏 (ブリティッシュ・コロンビア大学・教授)「国際紛争と歴史を動かす力—変容する16世紀末の東アジア社会—」が議論を総括する形で、

16世紀から17世紀にかけての東アジアの社会構造の変化を日本・朝鮮の比較を通じて分析した。質疑応答ではフロアを含めて活発なやり取りが展開され、特に壬辰倭乱を巡る問題ではそれぞれ政治的にも敏感なトピックながら、現在の国民国家の枠を越えて日朝双方の当事者の立場や意識についての理解を深めることができたのは大きな収穫と言えよう。



討論の様子

岡本弘道 (COE-PD)

坊津で考えたこと ―交渉拠点のその後―

荒武 賢一郎（文化交渉学教育研究拠点・助教）

文献史学とフィールドワークを重ね合わせるなかで、過去と現代にかなりの違いを感じる事がしばしばある。たとえば、かつては城下町の中心地であったところが農地に変わっていたり、現在は漁業で生計を立てている地域が実は商業の町であったり。地域にはそれぞれの歴史があり、そしていくつもの顔を持っている。



現在の坊津

2010年3月、私は初めて薩摩半島の坊津（ぼうのつ、鹿児島県南さつま市）を訪れた。滞在中は、東シナ海から吹きすさぶ強風と大陸からやってくる黄砂の影響をまろに受けた。そのような天候を抜きにすれば、坊津は静かで穏やかな漁師町、との表現が適している。しかし、ここはかつて博多津（福岡県）や安濃津（三重県）と並んで「日本三津」と呼ばれた諸外国に対する日本の玄関口であった。古くは遣唐使船が入り出したと伝えられ、中世後期にはアジアを席卷する倭寇の拠点、そして江戸時代にも薩摩の密貿易で重要な役割を果たした。まさに交易のターミナルで、海域アジアの要衝であったわけである。



坊津から東シナ海を望む

その一方で密貿易が激減した18世紀後半から19世紀初頭にかけての坊津はどのような町だったのか。私は現地に入る前からずっと気になっていて、何とかその一端を明らかにしたいという好奇心が芽生えてきた。

そのきっかけを与えてくれそうなのが、坊津歴史資料

センター輝津館の常設展示に陳列されている一点の軸物である。私の眼前でキラリと光るこの掛け軸は、江戸時代の坊津で手広く商売を営んでいた森家に伝来したもので、これには5点の仕切状（商品取引の際の送り状）がまとめられている。5点の文書にはいずれも天保13年（1842）9月とあり、森家から商品を購入した諸地域の商人たちが差し出したものであった。商人たちが拠点としている場所は定かではないが、1人だけ「兵庫・小豆屋市左衛門」との署名があり、これを兵庫津（神戸市）と仮定するならば、西日本全体を巻き込んだ広範囲に及ぶ物流の状況を垣間見ることができる。



人々の生活を支えた井川

彼らが森家から買い付けたのは、坊津や天草、五島の鯉節であった。カツオといえば、坊津の隣町にある枕崎が全国的に有名だが、五島列島から屋久島にかけての「西海主軸ライン」は、当時においても日本有数の漁場であった。話しを森家の商売に戻すと、地元の産品が売られているのは当然だが、少し距離のある天草や五島列島の鯉節が坊津で取引されているのはやや意外な感じがする。しかしこの3つの地域を、交易の伝統を持つ坊津の商人たちがリードしていたとするならば、それほど違和感はない。彼らは内外の情勢に機敏な反応を示し、新たな活路を見出そうしたのである。かつてアジアへの窓口だった坊津は、西海地域における物流のターミナルへと変化を遂げた。流れゆく時間のなかで、小さな町並みはその表情を変えながら今日に至っている。



唐人町付近の様子



文化交渉学専攻 RA 対談

内外から見たヴェトナム—バインミーはフランスパン？—

2009年8月30日から9月8日の10日間、周縁プロジェクトの一環として、文化交渉学専攻院生はヴェトナム・フエに滞在し、フィールドワークを行った。参加した越・日・韓・中・台湾出身の学生たちはヴェトナムと自己の文化の差異、自己と他地域の学生との文化背景の違いについてどのように考えたのか。身近に潜む「食」というテーマから話し合ってもらった。

稲垣智恵：ヴェトナムはフランスの植民地だったこともあり、コーヒーとフランスパンを街の至る所で見かけました。ホテルでも毎朝頂きました。

田中梓都美：フランスパンは皆さんの国で何と呼びますか。

馮赫陽：中国は「法棒」や「法棍」などと言います。「法」が「フランス」を意味し、「棒」「棍」は細長い形を表しています。

陳其松：台湾では日本と同じで、「法國麵包」、つまり「フランスのパン」と言います。

鄭英實：韓国では音訳で、「마게트(バゲット)」と言います。

グエン・ティー・ハータイン：皆さんがヴェトナムで食べたパンは、現在「Bánh mì (バインミー)」と呼ばれるもので、フランス植民地時代にもたらされたパンをヒントに、ヴェトナムで中国人が作った、ヴェトナム特有のものとしてされています。日本人が大陸から伝来したお米を見ても、外国を連想しないのと同様に、ヴェトナム人はBánh mìに対して外国のイメージを抱きません。Bánh mìはそれだけヴェトナムの人々にとって、ごく庶民的なものになっています。

田中：Bánh mìは形は似ていますが、「フランスパン」という名称では認識されず、非常にヴェトナム的なものとして感じられているようです。では、ヴェトナムにフランスパンと呼ばれるものはありますか。

ハータイン：ヴェトナムにも「Bánh mì Pháp (バインミー・ファッ)」と呼ばれる、訳すとフランスパンとなるパンはありますが、この言葉からは、お店で売っているものを連想します。Bánh mìはおばあさんが籠に入れて売ったり、屋台で売られています。この2種類には異なるイメージがあります。



バインミー

陳：確かにBánh mìはいつも食べているフランス

パンより柔らかかったですが、形状と、ヴェトナムとフランスが共有する歴史的背景から、私はBánh mìはフランスパンで、高級なパンだと思い込んでいました。なぜなら、法國麵包は、西洋の映画に出てくるような、非日常的で、上流階級のイメージがあるからです。普段そんなに食さないことも、このイメージを創生しているでしょう。

稲垣：白いワンピースを着た上品な人がオレンジと一緒に紙袋に入れて持っていそうですね。確かに日本でも同様のイメージがあります。

鄭：韓国では、パンは主食ではなく、お菓子に分類されるので、そもそも마게트に対する特別な印象はありません。마게트는どこにでも売っているし、韓国で有名なパン屋はフランス風の名前がついていますが、高級感はありません。

海曉芳：中国でも、パンはそこまで生活に浸透しておらず、ファストフードのように時間がない時に食べるものなので、法棒から高級という言葉は連想出来ません。

馮：私たちは細長いという形状だけで、ヴェトナムで食べたBánh mìはフランスから伝来したものだと考えてしまいました。自国の文化に影響されすぎて、今回対談を行うまで、ヴェトナムで毎朝食べたパンの名称を聞くことさえありませんでした。

鄭：概念と名称を同一視してしまったことを、非常に怖く感じました。ヴェトナムに滞在していないながら、内側から考えるという視点が欠けていました。

稲垣：「細長いパン」という、たったこれだけのものでも、名称やイメージが各国で大きく異なることを実感しました。以降、我々は異文化を理解する時、自分の有する概念と、現地の人のそれがどの様に異なるのか、考察する必要があります。両方の立場から物事をみるという態度が文化交渉学の研究に必要な要素だということ、今回改めて実感しました。皆さん、今日はありがとうございました。

一同：ありがとうございました。



第5回

「昆布」「海帯」そして「タシマ」

岡本 弘道（文化交渉学教育研究拠点・PD）

「昆布ロード」という言葉がある。もともと日本の中でも北海道か東北地方北部に産出地が限られる昆布は、海上交通の発展に伴い日本海沿岸から西日本にも大量に運ばれるようになった。江戸時代中期以降、長崎の唐船貿易における輸出品の中心が銀から銅と海産物に移るに従い、昆布はその中でも重要な位置を占めるようになり、さらに18世紀後半になると、薩摩・琉球（現在の沖縄）経由で進貢船による昆布の中国輸出も本格化してゆく。このような昆布の流通は、そのルート上の各地における昆布消費を刺激し、地域の食文化に少なからぬ影響を及ぼした。本来昆布を産出しない琉球でも、豚肉と共に昆布を炒めるクーブイリチーなど、独特の昆布食文化が発展したことはよく知られている。「諸色」海産物に区分される昆布は、「俵物」である干しナマコ・干しアワビ・フカヒレに比べ単価は安い。進貢船一隻につき概ね10万斤（約60トン）が中国向けに輸出された。積荷の中でもとりわけ大きな割合を占める昆布は、当時の琉球の進貢船貿易を支えていたと言ってよい。

実はこの「昆布」という名称、もともと中国から伝わってきたものらしい。6世紀の陶弘景『名医別録』に記された「昆布」という語は、既に平安初期成立の『続日本紀』に見える。10世紀になると『延喜式』『本草和名』『倭名類聚抄』などから、昆布が本来「ひろめ」「えびすめ」と呼ばれており、既にかなり広範に常用されていたことがわかる。その後、この漢語「昆布」の読みとしての「コンブ」が普及することになる。一方、陶弘景が「昆布」は「高麗」で産出すると記すように、朝鮮でも古来より昆布を採って食べていたようで、朝鮮語「タシマ」の漢字表記「多士麻」は多くの文献に記載がある。ところで昆布についてはもう一つ、「海帯」という名称もある。「海帯」



図1

は11世紀以降に見られる比較的新しい名称で、16世紀末の李自珍『本草綱目』も「海帯」の項目を「昆布」とは別に立てるが、その解説は簡素である。しかし琉球から持ち込まれた昆布も中国側では全て「海帯菜」と記録されており、近世以降中国で昆布が専ら「海帯」と呼ばれたことはまず間違いない。一方、「昆布」の方は同じコンブ目コンブ科のクロメを指す語として、現在では用いられている。近代以降、中国では昆布の養殖が試みられ、現在では世界に冠たる昆布生産大国となった。中華料理における昆布の位置づけは高くなく、むしろ庶民料理の食材である。「海帯絲」と呼ばれる昆布の千切りはそれ単体でも食卓に並び、また肉などと共に炒め物にしたり煮込んだりして食べる。沿海地域はもちろん、貴重なヨウ素の供給源として内陸地域でも多く食されるようである。韓国ではだしを取ったり肉・魚と共に煮込んだりする他、昆布を一口大に切って揚げたタシマティガクなどもある。日本では特に西日本を中心にだしをとるのに使う他、昆布巻や佃煮など様々な食べ方があり、縁起物としても慶事には欠かせない。現在の中国では安価でありふれた食材に留まっているようであるが、中国の経済発展に伴い日本料理店・韓国料理店が進出するなど、日本や韓国の食文化との交流が一層盛んになる中で、昆布の位置づけもまた変わっていくのかも知れない。

は11世紀以降に見られる比較的新しい名称で、16世紀末の李自珍『本草綱目』も「海帯」の項目を「昆布」とは別に立て



図2

るが、その解説は簡素である。しかし琉球から持ち込まれた昆布も中国側では全て「海帯菜」と記録されており、近世以降中国で昆布が専ら「海帯」と呼ばれたことはまず間違いない。一方、「昆布」の方は同じコンブ目コンブ科のクロメを指す語として、現在では用いられている。

近代以降、中国では昆布の養殖が試みられ、現在では世界に冠たる昆布生産大国となった。中華料理における昆布の位置づけは高くなく、むしろ庶民料理の食材である。「海帯絲」と呼ばれる昆布の千切りはそれ単体でも食卓に並び、また肉などと共に炒め物にしたり煮込んだりして食べる。沿海地域はもちろん、貴重なヨウ素の供給源として内陸地域でも多く食されるようである。韓国ではだしを取ったり肉・魚と共に煮込んだりする他、昆布を一口大に切って揚げたタシマティガクなどもある。日本では特に西日本を中心にだしをとるのに使う他、昆布巻や佃煮など様々な食べ方があり、縁起物としても慶事には欠かせない。現在の中国では安価でありふれた食材に留まっているようであるが、中国の経済発展に伴い日本料理店・韓国料理店が進出するなど、日本や韓国の食文化との交流が一層盛んになる中で、昆布の位置づけもまた変わっていくのかも知れない。

図1：クーブイリチー。昆布を豚肉と共に炒めるのは、鹿児島以北の日本とは異なる沖縄独特の食文化である。

図2：海帯絲。単体でも食される他、肉や野菜などと炒めることで様々な調理され、中華料理では身近な食材と言える。

❖ 創生部会

第25回創生部会：2009年12月18日

- * 呉震（関西大学・COE客員教授／復旦大学・教授）
「『宋明』から『明清』への転向—儒学と宗教の関係から見た明清思想の連続性」
- * 馮錦榮（関西大学・COE客員教授／香港大学・副教授）
「荒勝文策（1890-1973）と台北帝国大学の物理学研究」

❖ 第3回次世代国際学術フォーラムのご案内

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、第3回次世代国際学術フォーラムを開催いたします。

テーマ：文化交渉における画期と創造—歴史世界と現代を通じて考える—
日 時：2010年12月11日(土)、12日(日) 開催場所：関西大学以文館4階

❖ 出版物紹介

- * 松浦章／著・鄭潔西他／訳
『明清時代東亞海域的文化交流』
(江蘇人民出版社・2009年11月・365頁)(中国語)
- * 松浦章／著
『清代帆船沿海航運史の研究』
(関西大学出版部・2010年1月・716頁)
- * 吾妻重二／編著
『家礼文献集成 日本篇 1』 関西大学東西学術研究所資料叢刊27-1
(関西大学出版部・2010年3月・254頁)
- * 沈国威／著
『近代中日詞彙交流研究—漢字新詞的創制、容受與共享』
(中華書局・2010年2月・588頁)(中国語)
- * 沈国威・内田慶市／共編著
『近代東アジアにおける文体の変遷—形式と内実の相克を超えて』
(白帝社・2010年3月・276頁)
- * Nishimura Masanari／編著
Excavation of Da Kai: Southeast Asian Archaeology Data Monograph, No.1. The foundation for safeguarding the underground heritage in Southeast Asia.
(Foundation to Safeguard the Underground Cultural Heritage in Southeast Asia・2009年11月・106頁)(英語)
- * Nishimura Masanari, Sato Minoru, Kimura Mizuka and Okamoto Hiromichi／共編著
Cultural Reproduction on its Interface
(Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University・2010年3月・278頁)(英語)
- * Nguyễn Quang Trung Tiên, Nishimura Masanari／共編著
Văn hoá lịch sử Huế qua góc nhìn làng xã phụ cận và quan hệ với bên ngoài. (『フエの文化と歴史：周辺集落と外部からの視点』)
(Thuận hoá 出版社・2010年3月・379頁)(ヴェトナム語)
- * 篠原啓方・井上充幸・黄蘊・氷野善寛・孫青／共編著
『文化交渉による変容の諸相』
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2010年3月・357頁)
- * 岡本弘道／著
『琉球王国海上交渉史研究』
(榕樹書林・2010年3月・263頁)

❖ 人事異動

- * 2010年2月1日を以て、荒武賢一朗氏がCOE助教に着任した。
- * 2010年3月23日を以て、王頂倨氏がCOE-RAを退任した。
- * 2010年3月31日を以て、孫青氏がCOE-PDを離任、復旦大学に転出した。
- * 2010年3月31日を以て、大槻暢子氏、三宅美穂氏、董科氏がCOE-RAを退任した。
- * 2010年4月1日を以て、池田智恵氏がCOE-PDに着任した。
- * 2010年4月1日を以て、王亦錚氏、沈薇薇氏、鄒双双氏、鄭英實氏、陳其松氏がCOE-RAに着任した。
- * 2010年5月1日を以て、李宥霆氏がCOE-RAに着任した。

グローバルCOEプログラム
「関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)」
紀要原稿募集のお知らせ

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、紀要『東アジア文化交渉研究』(Journal of Cultural Interaction Studies in East Asia)の原稿を、下記の要領で募集しております。応募いただいた原稿は、編集委員の査読により、掲載の可否を決定いたします。

(1) 原稿

東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他

(2) 使用言語

日本語：20,000字程度

中国語：20,000字程度

英語：4,000語程度

(3) 注意事項

(a) 英語による要旨を、150語程度で添付してください。

(b) 提出はワード文書でお願いいたします。

(c) 注は脚注方式でお願いいたします。

(d) 文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。

(e) 図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。

(4) 投稿原稿の二次利用としての電子化・公開につきましては、紀要掲載時点で執筆者が本拠点到に承諾したものといたします。

(5) 提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学文化交渉学教育研究拠点

『東アジア文化交渉研究』編集委員会

TEL : 06-6368-0256

E-Mail : icis@ml.kandai.jp

編集後記

住み慣れた土地を離れ、新しい環境で、様々な出会いを体験しているが、まるで数年前に留学に行った時のような感覚を覚える。その時は、日本/中国という文化の差異に刺激を受けた。今回は、文学畑から言語、歴史、思想といった異なる専門、またヴェトナム、マレーシア、韓国など中国学というフィールドでは、なかなか出会えない方々に刺激を受けている。

出会う機会が多くても「出会えるかどうか」は自分にかかっている。留学中に驚いたのは、「バスの中でも出合いは出合い」という外国籍の友人だ。もちろん、それは彼らの異性へのアプローチの方法で、私は実行するには至っていない。だが、研究における「出合い」一見知らぬもの/人との新たな接触/交流は、自分以外の問題意識と触れあえる機会である。それは自分の問題意識の存在意義に対して疑問を投げかけると同時に、多角的な世界へのアプローチを獲得することにもつながる。ICISという多文化/多分野が集う場所でどれだけ「出会える」か、勇気をもって臨まねばならない。

(担当：池田智恵)

表紙写真について

2003年9月6日、内モンゴル西部エチナでの遺跡調査を終えた我々は、寧夏の銀川へと旅立った。およそ750kmの道のりである。

途中、天鷲湖という小さな湖の見える地点で休憩をとった。かつてこの道路の左手には、琵琶湖の2倍ほどの面積を持つ巨大な湖、居延沢が広がっていた。居延沢は気候の変動と開発の進展が原因で急激に縮小し、現在はこの天鷲湖のみが辛うじてその名残を留めている。

来し方を振り返ると、荒涼たるゴビを貫き地平線の彼方まで、舗装道路が一直線に続いている。オールドス・陰山から新疆東部のハミまでを最短距離で結ぶこの重要な交通路は、途中に点在するオアシスを辿りつつ、昔も今もほぼ同じ場所を走っている。そしてこのルートを、漢の若き將軍霍去病が、突厥やウイグルの騎馬軍団が、西夏やモンゴルの驛伝が、西域諸国の使節団や隊商が、そしてコブゾロフやスタインらの率いる探検隊が往来し、ユーラシアの東西を貫く歴史の流れを生み出してきたのである。

そして今、この幹線道路に沿って送電線と通信網が伸び、甘肅の嘉峪関からエチナを経由してモンゴル国を結ぶ貨物鉄道も整備された。ユーラシアの各地を行きかうヒト、モノ、エネルギー、そして情報の流れは、今後ますます活発化していくことだろう。



[撮影：井上充幸]



Reflection 6

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日：2010年（平成22年）7月31日
発行：関西大学文化交渉学教育研究拠点

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 TEL 06-69368026

E-Mail icis@jmkansai-u.ac.jp / URL <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>

関西大学文化交渉学教育研究拠点

ICIS

